

# 身体表現活動を見ることによる学び

— 付属幼稚園との協働研究を通して —

本 山 益 子  
小 原 幹 代  
浅 井 由 美

**要 旨** 本研究は、幼児教育科の学生が、身体表現活動の保育実践を見る機会のなかで、“何を” “どのように” 見ているかを明らかにすることを目的とした。その結果、1年生は、子どもに「成り込み」ながら、子どもの表現を見ていること。一方、2年生は、実践した「保育者」を「自分の経験を検証する目」で見ていることが特徴として明らかになった。

## abstract

This paper is designed to make it clear “what” and “how” students of our Child Education Course are observing during their child-care practices. As a result of analysis by the authors, it was found that freshmen were observing the children’s expressive behaviors by “being as if they were also children” and sophomores were observing “child-care workers” that they had experienced through the “their own eyes of verifying their own experie.” (70 words)

## 1. 研究目的

筆者は、保育者養成に携わるようになって以来、自分の専門とする身体表現活動を保育内容に取り入れ、子どもと共に身体表現を楽しめる保育者を育てたいとの思いを持ち続けている。なぜなら、その身体表現活動の場は、佐藤(1997)が言う『モノ』や『こと』や『人』との関わりを、学び手の身体を投企して紡ぎあげる営み<sup>1)</sup>としての「学び」の場、すなわち、子どもたちが「交わりながら育つ」<sup>2)</sup>場に相当すると考えるからである。具体的には、柴<sup>3)</sup>(1993)が言う「言葉によらないからだの動きによる表現の楽しさや喜びを知り、感性、観察力、思考力、想像性、からだをフルに働かせて、表現の経験を積むうちに、これらの能力が柔らかく養われ」さらに、「そこで養われた諸能力は、無意識のうちに日常生活などの場面で生かされている」ことに繋がるのである。つまり、身体表現活動の中で意識的な身体表現を繰り返すうちに、子どもたちのからだは日常生活において無意識のうちに「感じたことや考えたこ

とを自分なりに表現して楽しむ」<sup>4)</sup> ようになることが期待できるからである。また、この「交わりながら育つ」場は、西(1996)が言う『『動く』ことから始まるコミュニケーションは、からだとからだを共振させながら、お互いの囲いを越えて広がっていく』<sup>5)</sup> 場でもあり、イメージを接着剤として、子どもの「身体が響き合っていること」<sup>6)</sup> により、人間関係を円滑にする素養の育ちも期待できるのである。

そのような理由から筆者は、子どもと共に身体表現を楽しめる保育者を育てるべく授業の点検・評価・改善を継続し、学内外での共同研究にも取り組んできた。短大での授業においては、学生に自らの身体表現活動を通じて、その楽しさを実感させること、さらには、保育者の専門性ともいえる「柔らかなからだ」<sup>7)</sup> を獲得させることについては、ある程度の成果が得られていると思われる。しかし、保育現場に就職した後の保育内容に結びつけるには、まだまだ何らかの障壁があるとの感は払拭されていない。そして、保育現場における身体表現活動実践の現状とその要因を探るべく実施した調査<sup>8)</sup> からは、「イ

メージを中心とした」身体表現の「日常保育での実践」に関しては、「養成校での教育」よりも「保育所の年間計画」を重んじているという結果が得られた。この結果は、一保育者が身体表現活動を実践したいという思いを持っていても、保育現場の事情により困難な状況を示していると考えられる。つまり、保育現場における身体表現活動の実践については、保育現場の事情や短大での授業の限界などが壁として存在していることに気づかされる。この壁を打ち破る術を探求する中、子どもと共に身体表現を楽しんでいる保育者が付属幼稚園に存在することを知った。さらに、「保育活動としての身体表現のイメージがつかめなかった私にとって、見学実習で身体表現の保育活動をこの目で見る事ができたこと。さらに、本実習の研究保育では、自らが実践できたこと。これらの経験が今の私の実践を生み出した源だ<sup>9)</sup>」との報告に出会った。そして、「ひとりでも多くの子どもに身体表現の楽しさを経験させたい」という同じ思いをベースにして「身体表現活動の実践がで

きる保育者の養成を目指した付属幼稚園との協働研究<sup>10)</sup>を開始することになったのである。

近年、子どもを理解するてがかりとして、子どもを見ることへの関心は高く、その行為について佐伯(2001)は「私たちが目指すことは、見ようとして見るのではなく、見えてくることを、見逃さないこと<sup>11)</sup>」だと指摘し、鯨岡<sup>12)</sup>(1997)は「目を通して拾ってきたデータを、いわば身体を通して拾うのだ」とした上で、見る者の身体が「生きた身体としてその場に現前している」ことの必要性を説いている。さらに、三谷<sup>13)</sup>(2004)は自身の参与観察を通して「見ている対象と『対話』していくこと」の可能性を論じている。つまり、「保育を見る『まなざし』が変容していく(を培っていく)ということは、ただ見ている対象(子どもや保育者)の立場にたって、その対象を理解しようということだけでなく、その対象の背後にある様々な関係にも目を配り、関係づけられる世界を広げていくこと」だとしている。一方、鯨岡が言う「生きた身体<sup>14)</sup>」を獲得する上での

表1 保育実践の内容と展開

保育実践A. 「せんたくごっこ」	保育実践B. 「だんご虫になって遊ぶ」
2004年7月実施 うさぎ組(4歳児30名) 浅井由美担任教諭(保育暦19年)	2004年9月実施 れもん組(3歳児26名) 小原幹代主任教諭(保育暦25年)
観察学生(本山ゼミナール2年生13名) 5月末から20日間の「保育所実習」を経験	観察学生(見学実習生1年生5名)
<p>〔心の開放〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 扇風機になる</li> <li>・ひとりでぐるぐる回る</li> <li>・二人で回る</li> <li>・3～4人で手をつないで回る</li> <li>・集団になり、ホールの中で円を描きながら走って回る</li> </ul> <p>〔話し合い〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「せんたくかあちゃん」の絵本を読み、昨日、洗濯ごっこをして遊んだことについて話し合う</li> </ul> <p>〔表現〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シャツになる</li> <li>・洗い桶にシャツと水を入れる</li> <li>・洗剤を入れてシャツが洗濯される</li> <li>・絞る</li> <li>・ロープに洗濯バサミで止めて干す</li> <li>・お日様が出てくる</li> <li>・風が吹いてくる</li> <li>・乾いた洗濯物をたたむ</li> <li>・引き出しに入れる(保育室に戻る)</li> </ul>	<p>〔導入〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本「だんご虫のころちゃん」を見る</li> </ul> <p>〔心の開放〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアノに合わせて歩く</li> <li>・ピアノが止まったら、いろいろなポーズをとって止まる</li> <li>・自分でポーズを工夫する</li> <li>・友達のポーズを真似してみる</li> </ul> <p>〔表現〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「小さな小さな卵になーれ」の言葉で卵に変身する</li> <li>・卵の中からいろいろなものが生まれてくる(ひよこ、へび、カエル)</li> <li>・だんご虫が生まれる</li> <li>・お散歩に行く</li> <li>・葉っぱを食べる</li> <li>・カマキリに襲われて丸くなる</li> <li>・もぐらに襲われて転がって逃げる</li> <li>・だんご虫のお母さんの所へ帰る</li> </ul>
<p>〔振り返り〕</p> <p>全ての子供が洗濯物になりきって表現したわけではないが、一見動かず、参加していないように見える子供も興味を持って見ていたり、小さな何気ない表現をしてアピールしたりしていた。そういう子供の存在を学生に気づかせる事ができた。しかし、イメージを引き出す事ができなかったのは表現活動や洗濯をするという経験の不足からであった。遊びの中でも洗濯ごっこを楽しんできたつもりであったが、クラス全体には浸透されていなかった。今後は、イメージを育てる経験活動の積み重ねを充実させていきたい。子供の表情や身振り、視線などに注意し、その子の思いを十分に汲み取ることが保育者に必要であり、子供を認めることにつながっていくことに気づいてほしい。</p>	<p>〔振り返り〕</p> <p>身体表現を自然な流れの中で楽しめるよう、その展開は子供からの言葉や体でのアピールを汲み取り、3歳児における個々の承認や触れ合いの要求を満足できるように配慮した。子供達が身体表現で遊ぶ楽しさや喜びを生き生きと表情や言葉に表したのを学生に見せる事ができた。見せる事で保育者側のねらいがより明確になり、子供たちがどれくらい楽しめて満足できたか、またそれがどのような生活意欲へとつながっていくのかという保育の原点を省みることができたと思う。保育の仕方が大切なのではなく、子どもと共に楽しい時間を過ごすことが大切であることに気づき、子供と保育を通して心を通じ合い、生きる喜びや力を共有していくことを学んでほしいと考える。</p>

身体表現活動の有効性は授業研究<sup>15)</sup>や保育者を対象としたワークショップの試み<sup>16)</sup>などから報告されている。そして、この身体表現活動についても、従前より子どもを対象とした研究はもとより保育者養成を観点とした研究も、いろいろな角度からアプローチされている。しかし、身体表現活動について見ることに焦点を絞った研究、あるいは、保育を見ることについて身体表現活動に限定した研究はなされていない。

そこで、まず協働研究の初年度においては、日常の保育に支障のない範囲で、実習生をはじめとする学生に身体表現活動を見せることを試みた。本論においては、この試みについての学生の学びを報告したいと考える。つまり、この試みを通して、学生が身体表現活動を実際に目にするとき、“何を” “どのように” 見ているのかを明らかにし、身体表現を見ることの“学び”を探求することを目的とした。そして、その学びが、卒業後の身体表現活動実践の原動力となる可能性について模索したいと考える。

## II. 研究方法

### 1. 保育の実践と公開

本学の幼児教育学科の学生（見学実習中の1年生5名・筆者のゼミ所属の2年生13名）を対象に、表1に示した内容の保育実践（身体表現活動）を見せる機会を提供することができた。この保育実践はあくまで子どもと保育者が楽しく過ごすことを本来のねらいとしている。したがって、学生に見せることを第一義的な目的にはしていないが、保育者養成の立場から、保育終了後に、学生に生じた疑問を解決するための質疑応答の場を設けた。

### 2. 感想の記述と分析

学生には保育実践（身体表現活動）と質疑応答の後に、保育実践を見て感じたことや考えたことなどの自由記述を求めた。

## III. 結果と考察

本研究では、1年生も2年生も自分が見せてもらった保育実践（身体表現活動）についての感想として、多くの記述を寄せてくれた。本論では、まず学生が“何を”見ているかについて、学生が目にしていない対象物としての「子ども」と「保育者」。現前で繰り返り広げられている営みである「身体表現活動」と

「保育」。そして、場を共有している自分が、内なる目で見える「自分」の5つの観点で学生の記述を抽出した。そして、その5つの観点を“どのように”見ているかについて、学生の記述を細分化し数量的に分析するのではなく、学生のそのときの学びを検討したいとの意図から、学生の実感を尊重すると共にその視点に着目し代表的なものを例に質的分析を行うことにした。さらに、この学びに関して、特に1年生と2年生の別にその特徴の考察を進めていく。

### 1. 子どもに関する視点

**感想1**：私たちが大学の授業で苦勞していた身体表現を、子どもたちはいとも簡単にやってのけていました。「みんなと違う動きをする」「身体いっぱい使って思いを表現する」「大きい・小さいの差をはっきりつける」ということを当たり前に行っていました。(1年生 a)

**感想2**：子どもたちはとても素直だなと思いました。私たちが同じ身体表現をやろうと思うと必ずといっていいほど、照れやはずかしいという気持ちが出ると思います。それに比べて子どもたちは照れやはずかしいというのは全くなく、素直に遊んでいるように楽しんでいるように感じました。(1年生 b)

**感想3**：私が授業で行った時は、恥ずかしさもあり、なかなか思うように体が動きませんでした。しかし、子どもたちはいろいろなポーズをとり、先生に見てもらおうと必死でアピールしてました。(1年生 c)

**感想4**：一番、子どもたちが喜んでいたらと思ったのが、先生が「コンコン」とたたきに回ったときでした。そして、たたかれた子からどんどん産まれていきました。卵から産まれるときは、今までと違ってみんな同じ動きをするのではなく、それぞれの動きをしていたように見えました。卵が産まれる時間が遅い子もいれば早い子もいる。このようなことはきくと意識してやっているのではないだろうけど、すごいと思いました。(1年生 b)

**感想5**：先生が「小さい卵になあれ」と言うと、子どもたちは丸くなって本当の卵のように小さくなりました。「たたいてみよーっ」と言うと、「やだ」と言ってみたり、身体だけでなく意識まで卵になっていることにも驚かされました。「そーっとなでたら産まれるかもしれない」と言われ、なでられた子どもは早く飛び出したいという思いがあるのか体を揺らして、うずうずしていました。ピアノの音でも反応し、音に合わせて体を動かしていました。(1年生 e)

**感想 6：**一人の男の子ははじめドアのところにずっと座っていて、みんながやっているのを見ていました。そして、先生が楽器をおいたらその楽器を鳴らしていました。そして、また元のところに座っていました。そして、みんなが「しぼる」という時に寝転んでいたら、その男の子も最後のほうに少しだけ寝転んでいました。その子はみんなと一緒に行動していませんでしたが、楽器を鳴らしたり、少しだけ寝転んだりして参加していたのです。(2年生 f)

**感想 7：**「しぼる」を表現するとき、まっすぐに寝ている子に先生は「もっとねじって」と言っていたが、まっすぐに寝ている子の中には「ねじる」を表現している子がいたかもしれないと思った。実際はどうなんだろう…？(2年生 j)

**感想 8：**表現する、しない子どもの一つ一つの姿の中に、様々な意味が込められている事も知りました。たとえば、進んで表現する子は、“自分の中だけでじっくり表現を楽しんでいる”のか“先生に誉められた一心”なのか“友達の表現を一生懸命真似ている”だけなのか。反対に表現をしない子は“体調、気分の不良”“見たり聞いたりして楽しみたい”、“先生の気を引きたい”等が考えられるように思いました。(2年生 d)

**感想 9：**子ども達はいろいろな物を思いつき、先生に伝えているのだと思いました。それを受け止めてあげることで、またいろんな表現をしていくのだと思いました。(2年生 b)

**感想 10：**表現しやすいように先生が上手に導入していったとき、もう子どもは扇風機になりきって回っていました。子どもは思ったこと、体で感じたことをすぐ表現することができるので、表現力はすぐれたものをもっていることが分かりました(2年生 c)

まず、今回対象とした学生は、授業の中で身体表現活動をしている子どもの姿をビデオを通して見たことはあるが、実際に活動しているところを目にするのは初めてである。したがって、子どもに関する記述は大変多く抽出することができ、現前で繰り返られる子どもの表現する姿におおいに心を動かされていることが確認できた。

特に1年生は感想1から感想3の記述に見られるように、子どもの表現している様子を全体として捉え、授業における自分の姿と比較する目で子どもの表現を見ている。私たちは「恥ずかしかった」のに、子どもたちは「いとも簡単に」やっており、「素直」だし、「必死でアピールしている」ことに新鮮な驚

きを感じている。さらに、保育者に導かれた子どもの表現に関しても、1年生は感想4・5の「先生が『コンコン』とたたきに回ったとき」「先生が『小さい卵になあれ』と言うと」など、保育者の具体的な働きかけと、それに刺激を受けて生じた子どもの表現を詳細に記述している。すなわち、この保育実践(身体表現活動)を見ていたときの1年生は、表現する子どもを冷静に客観的に見ているというよりは、子どもに「成り込み」<sup>17)</sup>自分が表現している気持ちで、まさに保育者の言葉も自分に向けられたものとして聞き、「いま・ここ」に繰り返られる子どもの表現を、自らの身体に通底したものとして感じとっているのではないだろうか。

一方、2年生は子どもを全体として捉えるのではなく「一人の男の子は(感想6)」「まっすぐに寝ている子(感想7)」などの目にとまった印象的な子どもの表現を拾い、「実際はどうなんだろう…？」と一人一人の表現を読み取ろうとしている。特に、感想8の「表現する・しない子どもの一つ一つの姿の中に意味が込められている事」に気づいている様子は興味深い。2年生は直前に保育所実習を経験しており、これらの一人一人の表現を拾う目には、実習のなかで子どもを理解しようと努力した姿勢が反映されているものと考えられる。また、保育者に導かれた子どもの表現についても、まず、子どもの表現の変化を捉え、その変化の要因を援助のポイントとして探ろうしていることが感想9・10の「それを受け止めてあげることで」や「先生が上手に導入していったとき」などの記述から読み取れる。

## 2. 保育者に関する視点

**感想 11：**先生も子ども達の意見を次々と取り入れて、活動内容を広げていました。子どもの声に耳を傾けて、それを瞬時に形に表してしまえることは、やはりすごいことだと思います。(1年生 a)

**感想 12：**先生の活動の進め方もとても参考になりました。まず、「ころちゃんとだんご虫」という絵本を読み、そのストーリーに合わせて、だんご虫の表現を進めていました。途中、カマキリに襲われる場面では、先生がカマキリを演じ、子ども達も食べられまいと、体を丸めていました。また、穴に落ちてモグラに食べられそうになるなど、まるで、子どもたちを絵本の世界に連れて行っているかのようでした。

(1年生 c)

**感想 13：**子どもがイメージしやすいように語りかけたり、

実際のだんご虫の卵やカエルの動きを思い浮かべ、自分なりに楽しんで動くことができるようなストーリーの展開の仕方や、おもしろい動きや楽しそうな表情の子どもを取り上げ、ほめたり全体の子どもに紹介したりして知らせ、「マネしてみよう」とか友達の様子にも関心をもたせていたのはさすがだなと思いました。(1年生 d)

**感想 14:** 私が最も印象に残ったことは、先生がその場で大きな動作で表現をしていたことです。例えば、「せんたくかあちゃん」になりきって洗濯物をゴシゴシ洗う姿や水を流す時の動作など、子どもが表現するに当たってイメージしやすいように本当に洗濯物をゴシゴシと洗っていて本当の「せんたくかあちゃん」のように見えました。(2年生 e)

**感想 15:** 活動には導入がとても大切だということを改めて実感しました。まず、「せんたくかあちゃん」という絵本を読み聞かせていました。絵本もただ読むのではなく、子どもたちに問いかけをし反応を待って、会話をしながら進めていました。そして絵本も良いところで止め、洗濯について知っていること、洗濯ごっこで洗濯したときの感想などを子どもたちと話し合いました。子どもから出てくる洗濯物についての意見や考え、それぞれの感想に耳を傾け思いを十分に受け止めていました。(2年生 i)

**感想 16:** せんたくごっこをする上で、先生が「次はしぼるよ～」というのではなく、「すすいだ後は何するんだっけ?」と全てにおいて子どもに問いかけていたことがとても印象的でした。(2年生 j)

保育者に関する記述に関しては、1年生は特に展開を中心とした子どもと保育者のやり取りに心を動かされている。感想 11 では子どもの意見を瞬時に取り込み臨機応変に対応する保育者の姿を「すごい」と感じ、感想 12 では保育者自身も表現者として演じながら展開していく様子を「子どもたちを絵本の世界に連れて行っているかのよう」だと記述している。感想 13 では「ほめたり全体の子に紹介したり」して子どもの表現を受容する保育者の態度を「さすが」と感じている。つまり、子どもの身体表現を導くための援助について、授業で耳にした知識を自分の目で確認する新鮮な視点を感じ取ることができる。

それに対して2年生は、保育所実習において研究保育の経験もあるため、その自分の経験を検証する目で保育者を見ていることがわかる。感想 14 では、保育者自身の「大きな動作による」表現者としての姿を「最も印象に残ったこと」と記述している。感

想 15 では活動における導入の大切さを「改めて実感し」、感想 16 では強制しない保育者の「問いかけ」による言葉を「とても印象的」だったと感じている。これらは保育者としての自分には欠落していたことなのであろう。すなわち、実習における保育者としての自分の体験を振り返る中で、現前の保育者に「成り込み」、その渦中における保育者の姿や言葉が強烈に学生の身体に浸透していることが窺える。

### 3. 保育に関する視点

**感想 17:** 私は見ているとき、活動から少しはずれてしまっている子にばかり目がいきってしまいました。しかし、その子たちは全然参加していないのではなく、先生の声は聞いているし、活動にも全く参加していないわけではないことが分かりました。まるきり違う遊びをしていても遊びの中でテーマにそっていればその子達を認めてあげれば活動に戻ってくることもあると聞き、無理やりに参加させるのではなく、だんだんと声をかけていき、子どもが参加したいと思ったときに声をかけていけばいいんだと思いました。

(2年生 b)

**感想 18:** 《洗濯ごっこ》をしていくうちに、保育者が相手にするのは、子どもとはいえ人間なので、子どもは絶対に保育者の思っていた姿にはならないということがよくわかりました。保育者のたてた指導案どおりにいかない、それが当たり前なんだということもわかりました。(2年生 d)

**感想 19:** 保育に参加していないような子どもでも、それはその子なりの表現なのかもということです。参加していないからといって、強制的に自分の保育にさせようとしてはいけないのだとわかりました。

(2年生 g)

保育に関する記述は1年生の感想からは抽出できなかった。つまり、はじめての実習期間中である1年生は自分の目で保育の営みを見てはいるものの、それを保育として捉える視点は備わっていない段階にあると考える。

一方、2年生は実習で困惑した「思い通りにいかない保育」や現前の「集団から外れる子ども」を目にすることにより、まさに保育者に「成り込み」自分も「どうしよう」と動揺していることが推察できる。この「成り込み」によって、自分の実習での保育と照合する内なる目に鋭さが増したと考えられる。

さらに、保育直後に主任教諭に質問する機会が得られたことが自らの問題を解決することに繋がり、それぞれの学びを築いている。具体的に見てみると、「活動から少しはずれてしまっている子にばかり目がいっていた」感想 17 では「認めてあげれば活動に戻ってくることもある」ことを学び、感想 18 の学生は「保育者の立てた指導案どおりに行かない、それが当たり前」と記述しており、指導案通りに展開することに心を奪われがちの学生に、保育の主人公は子どもであることを納得させる体験になったことも見逃せない。感想 19 においては「保育に参加していない子どもでもそれはその子なりの表現かも」という、まさに子どもの「表現」の捉え方についての学びが記述されている。つまり、この記述は「集団から外れる子ども」を「表現していない」と捉えるのではなく、大場(1996)が言う「存在すること自体を広い意味での『表現』と」<sup>18)</sup> 捉えることを意味しており、このような子どもに対してどのような対応をすべきなのかという疑問についても解決の糸口が見つかったことを示唆している。

つまり、今回、保育者自身も「全ての子どもが洗濯物になりきって表現したわけではない」と認める保育が保育実習直後というタイムリーな状況で提供されたことによって、学生の保育を検証する目が有効に働いたと考える。さらに、保育実践後の質疑応答の場での保育者との「対話」<sup>19)</sup> も有効に働き、学生に大きな学びをもたらしたものとする。

#### 4. 身体表現に関する視点

**感想 20:** 自分たちが大学の授業で「身体表現」をする時は、少し照れがあったり、頭で考えてしまう部分がありましたが、子ども達の純粋で素直な表現を自分の目で見ることによって、体全体を使って自分なりに表現することを楽しむということは大事なことだと実感しました。(1年生 e)

**感想 21:** 身体表現をしている間、実習中の3日間の中で見たことのない表情をする子がほとんどで、子どもの生き生きとした本当の姿を目の当たりにすることができました。

(1年生 e)

**感想 22:** 表現活動は子どものありのままの姿を見ることができるといい活動だと思いました。(2年生 c)

**感想 23:** 表現活動を見て、私には難しい活動ではあるなと思いましたが、子どもたち一人一人と関わることができ、一番コミュニケーションをとることの

できる保育活動だと改めて実感することができました。(2年生 e)

**感想 24:** 私は今回の身体表現を見に行くまで「子どもたちが身体表現をするということは、そんなにないのかな」と思っていたのが本音です。今まで、「表現」について勉強して、「子どもは常に表現していること」や「子どものありのままの表現を受け止めることが大切だということ」などがわかりました。だからといって「子どもたちがみんなで身体表現をすること」がそんなに大切ではないのではないかと思っていました。しかし、洗濯ごっこの身体表現を見せてもらって先生の話聞いて表現することの大切さがわかりました。子どもたちはとても楽しそうに笑顔でやっていました。

(2年生 f)

身体表現に関しては、1年生も2年生も授業の中で体験し、その特性や意義についても学習している。そして、授業を通じてその楽しさを実感することはできても、子どもとの活動はイメージできないのが現状であったと考える。しかし、今回「自分の目で見ることによって」その重要性が確認されたことが感想 20 には記されている。頭で理解していた身体表現活動の特性を「子どものありのままを見ることができるといい活動(感想 22)」「コミュニケーションをとることのできる保育活動(感想 23)」だと再確認している。特に、感想 24 が示しているように、身体表現活動の必要性について勉強しても納得できなかった2年生が、「洗濯ごっこの身体表現を見せてもらって先生の話聞いて表現することの大切さがわかりました」と記述していることに注目したい。すなわち、これらはすべて「場に臨む」<sup>20)</sup> ことが生み出す、お互いのからだの共振によりもたらされたものとする。子どもの生き生きする姿が醸し出す空気の受信による効果であり、まさに身体表現活動の魅力だと言える。しかし、これらはビデオの映像からは十分に感じ取ることができない。頭での勉強が「場に臨む」ことによって、自分の身体を通しての学びに変換されていることが示されており、まさに、その場で見ることの意義がここに存在していると言えるだろう。

また、感想 21 は、初めての实習期間中の1年生が「身体表現をしている間、3日間で見えたことのない表情をする子がほとんどで」と記述している。すなわち、1週間という実習期間に「他の活動での子どもと比較する目」が働くことによって、「子ども

の生き生きした本当の姿」を実感していることがわかる。様々な子どもを見ることが可能な実習という機会に身体表現活動を見ることの効果を確認できたと考える。

## 5. 自分に関する視点

感想 25：見学している私たちまで楽しくなりました。

(1年生 a)

感想 26：私たちも無心になり素直に楽しむことも時には大切なのかなと、いろんなことを考えさせられるよい機会になりました。また、子ども達の素敵な部分を見ることができ、とても自分の中でよい勉強になりました。これから生かすことができるといいなと思います。(1年生 b)

感想 27：実際に子どもの身体表現を見ることができ、目や耳や心や体で感じるものもあり、感動してしまいました。小原先生や子どもたちから良いところを吸収し、次の実習に生かされるように、これからの授業などで努力し、頑張りたいと思います。(1年生 d)

感想 28：もっと子どもの表現をたくさん見て、常に子どもが何を表現しているのかアンテナを立ててテレパシーを感じるようにしたいと思いました。そして、失敗を恐れずに身体表現をしていきたいと思いました。(2年生 f)

感想 29：私が実習に行ったとき、子どもの様子を見る余裕がなく、子どもが楽しむのも考えられず、また自分自身も楽しんでいなかったように反省できます。この時、自分が楽しまなくては子どもも楽しんでくれないのだとわかりました。(2年生 h)

感想 30：私も表現活動をやってみたいなと思いました。でも、まだ少し自信がありません。だけど、今日、実際に活動を見ることができたので勉強になりました。活動の進め方や声かけの仕方、難しそうだったけど、失敗から得られるものもあるし、子どもにとっては無駄な活動ではないので、いつか！やってみたいです。(2年生 k)

最後に、「自分」に関する記述を見てみる。1年生は「私たちまで楽しくなった(感想 25)」とワクワクした自分を認めている。「自分の中でよい勉強になりました。(感想 26)」と自分なりの学びも自覚している。さらに、感想 27には、その感動が「目や耳や心や体で感じるもの」だと示されている。そして、「これから」や「次の実習」で生かしたい

との意欲も記述されていた。その意欲が2年生では「常に子どもが何を表現しているのかアンテナを立ててテレパシーを感じるようにしたい。そして、失敗を恐れずに身体表現をしていきたい(感想 28)」や「活動の進め方や声かけの仕方、難しそうだけど…いつか！やってみたいです(感想 30)」と具体的な言葉で記述されている。一方、感想 29は過去の実習を振り返り「自分自身も楽しんでいなかった」との反省を記している。これらの記述から「保育者としての自分を見据えた視点」を感じ取ることができた。つまり、これらの「自分」に関する記述からは、実際に目にすることができる「子ども」「保育者」「身体表現活動」「保育」を見ることを通して、内なる目で「自分」をも眺めていることがわかる。それは、過去の自分を振り返るとともに、未来の自分にも繋がる視点である。この自分との「対話」が、それぞれの学生に学びをもたらしていると思われる。

## IV. まとめ

今回、異なる保育者による身体表現活動の実践ではあったが、1年生も2年生もその場で見る事が、それぞれの立場での学びに繋がっていることを確認することができた。

今回の試みは鯨岡<sup>21)</sup>(1999)が言う「関与しながらの観察」の中で、「観察者が生きた身体として現前しているだけで、そこに何らかの映し出しが生じたことによる学びを示している。そして、その視点については表2にまとめることができた。1年生は子どもに「成り込み」子どもの表現を「自分の表現と比較する目」で、さらに、「保育者に導かれた表現を詳細に拾う目」で見ている。そして、授業で勉強した頭の中の「知識を確認する新鮮な目」で保育者の姿を捉えている。眼前の営みについては「保育」として捉えるには至らず、「他の活動での子どもと比較する目」で「身体表現活動」の「特性・意義を確認」している。さらに、「自分の心の動きを感じる目」で自分との「対話」を実現している。一方2年生には、子どもではなく保育者への「成り込み」が認められ、子どもの表現も「一人一人の表現を拾う目」で子ども理解に努めるとともに、その子どもの「表現を導く援助のポイントを探る目」で保育者の関わりを捉えている。同様に、保育者を実習での「自分の経験を検証する目」で、さらには保育についても「自分の保育と照合する目」で見ている。そ

表2. 保育実践（身体表現活動）を見る視点

対象	1年生	2年生
子ども	自分の表現と比較する目 保育者に導かれた表現を 詳細に拾う目	一人一人の表現を拾う目 (子ども理解) 表現を導く援助のポイント を探る目
保育者	知識を確認する新鮮な目	自分の経験を検証する目
保育		自分の保育と照合する目
身体表現活動	特性・意義を確認する目 他の活動での子どもと比較する目	
自分	自分の心の動きを感じる目	保育者としての自分を見据えた目
本人	子どもへの「成り込み」	保育者への「成り込み」

の根底には「保育者としての自分を見据えた目」が存在しており、「保育者としての視点」で自分との「対話」も果たしていることが明らかになった。

また、このような機会を提供した時期について考察してみると、1年生は見学実習中に見たことが、他の活動の子どもと比較する場として有効であった。一方、2年生は保育所実習直後の観察であったので、その経験を拠所として保育者への「成り込み」が起り、「保育者としての視点」が形成されたことは見逃せない。つまり、見学実習中や保育所実習直後という時期の、実習と絡めた「関与しながらの観察」の中に、「身体表現活動」のみを独立したものとして見る以上の効果が認められたと考える。

そして最後に、今回の試みが保育現場での実践に結びつく可能性について模索するために、今回対象とした1年生に、2年生としての在籍期間にいくつかの質問をしてみた。すると、5名全員がこの観察を記憶しており「役に立った」、就職後も身体表現活動を「実践したい」との意向をもっていることがわかった。さらに、3名の学生は2年次の保育所実習か幼稚園実習において、実際に何らかの身体表現活動を実践していた。つまり、身体表現活動においては「関与しながらの観察」が「子どもとの活動イメージ」を明確にし、「自分の楽しさ体験」を「子どもとの実践」に結びつける際の潤滑油として有効に働く可能性の兆候を、ここに見つけることができたと思われる。今後も協働研究を継続し、この兆候を実証したいと考える。

## 【引用文献】

- (1) 佐藤 学：学びの身体技法 太郎次朗社 p.13 (1997)
- (2) 佐藤 学：学びの身体技法 太郎次朗社 pp.8-24(1997)
- (3) 柴真理子：身体表現論 東京書籍 p.209 (1993)
- (4) 文 部 省：幼稚園教育要領 p.10 (1998)
- (5) 西 洋子：からだや動きで表現するために 全国身体障害者総合福祉センター p.13 (1996)
- (6) 斎藤 孝：コミュニケーション力 岩波書店 p.74(2004)
- (7) 西 洋子：保育者と身体性 保育学研究第39巻1号 保育学会 p.12 (2001)
- (8) 本山益子他：保育の中の「身体表現」保育士養成研究第20号 社団法人全国保育士養成協議会 p.102表5 (2002)
- (9) 浅井由美他：からだ・表現・かわり—その可能性をともに育むために— 日本保育学会第57回大会自主シンポジウム5における報告 (2004)
- (10) 浅井由美他：身体表現活動の実践ができる保育者の養成を目指した附属幼稚園との協働研究Ⅱ 日本保育学会第58回大会論文集 pp.60-63 (2005)
- (11) 佐伯 胖：幼児教育へのいざない 東京大学出版会 p.20 (2001)
- (12) 鯨岡 峻：原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房 p.29 (1997)
- (13) 三谷大紀：保育を見る「まなざし」の変容の分析 保育学研究第42巻2号 保育学会 p.57 (2004)
- (14) 鯨岡 峻：原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房 p.29 (1997)
- (15) 新山順子：保育者としてふさわしい身体を養成する身体表現の可能性とその実践 保育学研究第41巻第2号 pp.16-23 (2003)
- (16) 西 洋子：保育者と身体性 保育学研究第39巻1号 保育学会 p.12 (2001)
- (17) 鯨岡 峻：原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房 p.103 (1997)



- (18) 大場牧夫：表現言論 萌文書林 p.158  
(1996)
- (19) 佐藤 学：学びの身体技法 太郎次朗社  
pp. 25-27 (1997)
- (20) 鯨岡 峻：関係発達論の構築 ミネルヴァ書  
房 p. 115 (1999)
- (21) 鯨岡 峻：関係発達論の構築 ミネルヴァ書  
房 p. 143 (1999)

